

## 東北タイ農村における姉妹世帯間関係

——経済生活の変化の中で——

藤 田 直 子

### はじめに

水野浩一は、東北タイの家族を特徴付けるものとして「屋敷地共住集団」という概念を提示した。水野によれば、屋敷地共住集団とは親族関係にある複数の世帯が共同耕作によって結合され、2世帯以上によって構成される一種の農業共同組織 (a kind of agricultural corporation) である。水野のばあい、屋敷地共住集団に必須な要件は屋敷地内共住ではない。娘が結婚し世帯分けした後も親のもとで農地を共同耕作し日常のあらゆる生活分野でできる限り助け合うことを水野は強調する。彼らの間では「共働共食 (*het nam kan, kin nam kan*)」という強い共同規範があり、共同感情が支配的であるという。

その後今日に至るまで、この特徴付けについては多くの議論がなされた。筆者はあらためてこの議論を再検討するつもりはない。ただ、40年という年月の中で、東北タイ農村家族の暮らしぶりは大きく変化している。そして、「共働共食」という原則の内実にも当然変化が見られる。そこで、東北タイ農村を対象にして、家族世帯の暮らしぶりの現状を明らかにする作業に取り掛かりたい。本論文では、この作業の手始めとして急速な社会的変化の中にある東北タイ・ローイエット県の一農村の家族世帯を例にその現状を示す。取り上げる家族世帯は、同一の屋敷地内に世帯を別にして居住する姉妹世帯である。

調査村ノーンクン村には、約141戸の世帯が居住している (2000年9月時点)。ここで取り上げる姉妹世帯と同様の同一の屋敷地内に共住する既婚姉妹世帯は、村全体では1割弱である。新婚早々の若夫婦の居住形態は、8割以上が妻方居住となっており、その後の世帯主夫婦が居住する屋敷地の6割弱は妻方両親の屋敷地である。また、何らかの形で妻方の親族の土地に居住する比率が全体として8割弱に達している[竹内 2000: 106, 111-112]。これらのことから、ノーン

クン村では妻方居住慣行が強く支持されていることがわかる。

以下、まず第一に、事例とする姉妹世帯が土地所有や生産労働の面でどのような関係にあるのかを確認する。第二に、姉妹世帯間において「共働共食」がいかに変化し、相互扶助がいかに行われているかに注目する。そして第三に、都市部に居住して働く若者と故郷の家族との関係について考える。

なお、記述は2001年の8月と9月に行った参与観察とききとりによって得た資料にもとづく。

## 1. 屋敷地共住と姉妹世帯

事例として選んだ3姉妹の姉テーンの家を訪れると、いつも子供たちが楽しそうに遊んでいる。この子供たちは皆テーンの子供というわけではない。テーンの2人の妹の子供も含まれている。テーンを筆頭に妹ブンホーム、妹ウボン<sup>2</sup>は同じ屋敷地内にそれぞれ世帯を構えている。そのため、子供たちは互に行き来し、いずれかの家でいつも遊んでいるのである。テーンたち姉妹もまた、互に行き来し合って生活している。

### (1) 世帯間関係の共同性と独立性

3姉妹は、結婚以前には現在の妹ウボンが住む住居で両親のもと2人の兄弟とともに生活<sup>3</sup>していた[図1参照]。その後、姉妹は1970年代頃からテーン、ブンホーム、ウボンの順で結婚していった。2人の男兄弟については、結婚と同時に実家の屋敷地と田の相続権も失い、妻方居住のため村外へ出ている。そして姉妹は結婚後、テーンは高床式住居を、ブンホームは平屋住居をそれぞれに実家の屋敷地内に建築し、そこに住み始めた。末娘であるウボンは、結婚後も実家にとどまり両親の世話をした[図2参照]。やがて、母親が他界し、父親は出家し村内にある寺院に住職として住み込むことになった。そのため、現在では高床式住居の実家にはウボンと夫と2人の娘の4人が暮らしている。

まず、土地の所有関係に注目すると次のとおりである。テーン姉妹は屋敷地にそれぞれに住居を建築して生活している。屋敷地は、いずれ分割される方向に行くであろうが、現在はまだ分割されてはいない。そして屋敷地の法的な名義は、未だに亡くなった母親になっている。そのためか屋敷地内の明確な土地

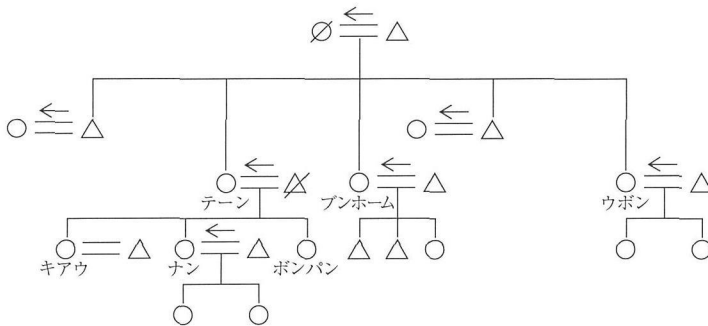


図1 3姉妹の系譜図

二重線は婚姻関係を示し、斜め線は死亡を示す。

○は女性を△は男性を示す。

の線引きはなされていない。そして、彼らに世帯ごとの境界を尋ねても定かではなかった。このことから、3姉妹は屋敷地を共同所有していることが理解できる。また、姉妹世帯はそれぞれ独立して農業経営を行っているが、田もいまだ亡き母名義のままであり、姉妹の共有状態が続いている。両親が没してしまえば土地所有権は姉妹で均分されるのが通常だが、この事例のように共有状態が続くケースも少なくない。

このばあい姉妹は亡き母を中心に結びついているが、こうした親と娘夫婦の関係を考える上では、当地の住居の間取りに関する観念も興味深い。東北タイの住居観について論じた S. J. Tambiah [1969: 431] によれば、両親の寝室 (hong poeng) は東側、娘夫婦の寝室 (hong suam) は西側にある。また、寝室は神聖なものであり最も神聖なものは、両親の寝室であると述べている。そして、娘夫婦は両親の寝室にはみだりに入ってはならないという禁止があると述べている。

ウボンの高床式住居には、北に向かって東西二つの寝室がある。そのうち、西側の寝室だけを使用している。使用していない東側の寝室は、ウボンの父親の寝室である。この父親の寝室には彼女の夫は入ってはならないという。しかし、ウボンの父親は前述したように、村内の寺院で住職として生活しているためこの家で生活することはない。このことをウボンに尋ねると、一緒に生活してはいないが、生きていたため父親の寝室を空けたままにして、自分たちは使用してはならないという。ただ、父親が他界するとともに夫も入ることができ使用可能となると彼女は話した。テーンやブンホームの住居に関しても、寝室

の配置などにウボンの住居ほど厳格なものではないが、同じようなことが見出された。このように親を中心とする家族秩序観念は3姉妹に受け継がれ、それぞれの家屋構造に表現されている。

つぎに屋敷地に共住する3世帯がそれぞれ世帯単位で独立している側面についてふれておきたい。

現在、テーンは母親から7ライの田を結婚と同時に所有している<sup>5</sup>。他の二人の妹も、結婚と同時にそれぞれ6ライずつ田を所有している。おそらく、事実上では、田の分割はされているようであるが、法的な名義はまだ亡くなった母親のものとなっている。田植えや稲刈りなどの農作業は、すべて別々に行う。テーンの夫は随分と前に亡くなっている。そのこともあってか、テーンの家では、次女のナン夫婦が農作業を行う。ナンの夫は現在、バンコクへ出稼ぎに出ている。田植えや稲刈りなどの農作業の繁忙期には、村へ帰省して作業を行う。テーンとはいうと、農作業をすることはほとんどなく、専ら孫の世話係りといったところである。また、アユタヤに出ているテーンの娘の長女キアウ<sup>6</sup>も、後述のように定期的に帰省するが、農作業をすることはない。キアウの二人の妹たちによると、「キアウは農作業は日焼けして黒くなるから嫌いな」ということだ。三女のポンパンも学校があるために手伝うことはできない。テーンの妹ブンホームとウボンは、それぞれ夫婦で作業を行っている。

収穫した米は、屋敷地内にある米倉に保管する。この米倉は、それぞれの世帯で所有している。米倉の床下では、テーンは水牛と牛を、ウボンは水牛を飼育している。それぞれに所有される米倉は、夫婦が一人前となり、独立したことを意味するとされている。このことから、姉妹世帯が個々に独立していることが理解できるだろう。

食事でもまた個々の世帯で独立して行われるものである。彼らは極々たまに、一緒に食事を取ることがあってもほとんどそれぞれの世帯ごとに食事をする。筆者はよくテーンの家で食事をご馳走になった。その際、いくらかたくさんの食事の量があったとしても、そこに居合わせたテーンの妹やその子供が同時に食事を取ることはない。もし、食事を与える場合でも一通り自分たちが終えた後であることがほとんどである。この正規の食事は、明白に世帯ごとの経済単位で区別された活動と見なされ、線引きがなされている。このように同一の屋敷地内で姉妹は、それぞれ別の家屋の下で個別に独立して暮らしている。この3

姉妹のばあい、水野が述べる「共働共食」関係にはなく、強い共同規範も認めにくい。しかし、社会的な生活面でこれら姉妹世帯間での相互扶助的な助け合いは行われている。次は、姉妹世帯間の相互扶助関係について見ていきたい。

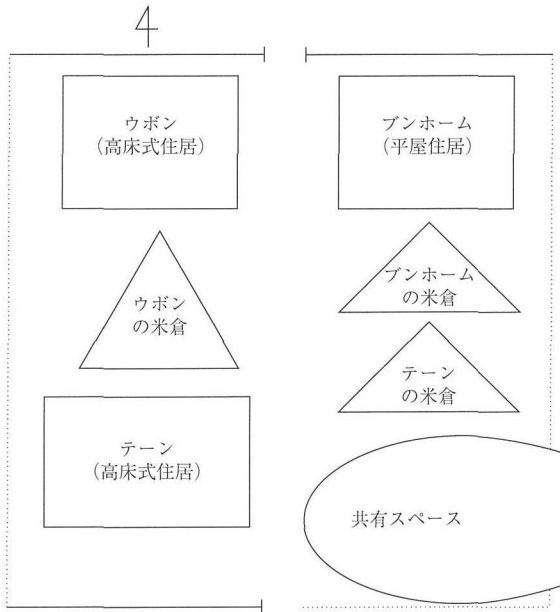
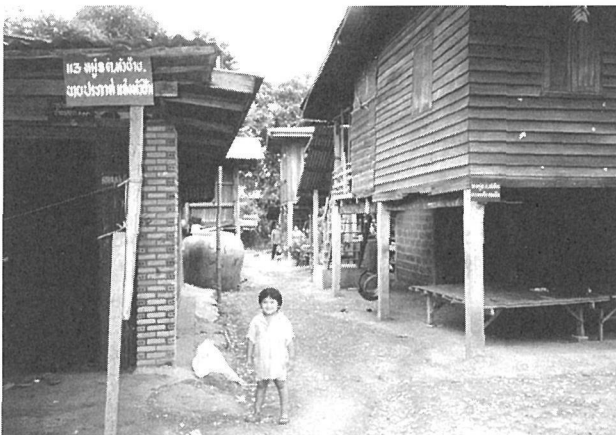


図2 屋敷地内見取り図



【写真1】 3姉妹が共住している様子

## (2) 屋敷地共住世帯間の相互扶助

仏教行事ブン・カーオ・サークの準備で村全体が慌しい9月のある日、テーンの家では寺院にお供えするお菓子作りで朝から賑わっていた。テーンの家では娘二人がお菓子作りを手伝っている。他方ブンホームとウボンは、まだ娘が幼いということもあってか二人でウボンの家の床下でお菓子を作っている。時折、ブンホームがテーンの家を訪れ、お菓子の出来具合を見たり味見をしたりする。姉妹はこのように、互いに助け合いながら作業を行うことがしばしばある。子供の面倒においてもそうであるだろう。悪いことをした子供は、たとえ自分の子供でなくても本気で叱る。また、おやつなどは平等に分け与えるというように、みんなで子供を育てているように感じられる。

食事の独立については前述した。しかし、独立しない食事もある。彼らは朝・昼・晩の食事以外にも間食をよくする。そのことに驚いていると、ナンが「これは *kin len* よ」と笑いながら教えてくれた。タイ語で *kin* とは食べる、*len* とは遊ぶを意味する。この *kin len* には相互扶助的なものが見られる。また *kin len* には、おそらく上で述べたおやつなども含まれる。そこでは、別世帯である子供たちも分け隔てなく共に食べている。*kin len* は正規外の〈遊び〉、そして狭い範囲ながら姉妹世帯間の社交的食事と位置付けられる。正規の食事と *kin len* という語の存在は、経済単位としての世帯ごとの独立維持のもとでの社交を含む、世帯間の相互扶助的な領域が明確に意識されていることを示唆している。

また、子供を育てることにおいては、責任は本来の親のもとにありながら姉妹世帯間で共に養育している。彼らは方角をとっても重視した生活を行っている。その一事例を上げて見たい。ある日の昼下がりにブンホームの末娘が、床下に吊るしたハンモックで頭を西に向けて昼寝をしようとしていた。その時、大人たちが声を荒げて彼女に頭の方角を東に変えるように注意したのである。頭の位置について注意した理由を尋ねると、テーンは「西は死を指すから良くない」と答えた。さらに、彼女は「西以外の方角なら頭を向けて寝ることができる」と答えた。彼らは、生活の中で重視する秩序などを、子供に教えるという行為も相互に行っている。このように、姉妹世帯間では社会的生活面において相互に助け合って生活を維持している。また、空間利用という面においても相互的な面が見られる。では、その空間利用とはどういったものなのか。

テーンの屋敷地の奥には、3姉妹の共有スペースと考えられる空き地がある。この空き地には、大きな樹木が数本植えられている。そして、米の収穫が終わると雨季の間の水牛や牛の餌のために、稲藁を高く樹木の間に積み上げる。雨季の間、水田では稲作が行われているため、水田には家畜を放牧することができない。そのため日中、水牛を屋敷地内に繋ぎ、夜になると米倉の床下に繋いで飼育している。空き地スペースは日中、家畜の格好の繋ぎ場となるのだが、おそらく餌の保管場所が近いということが関係していると考えられる。テーンの水牛と牛は、米倉の床下と米倉に隣接して屋根と囲いを付けただけの簡素な小屋で、雨季の間の日中も飼育している。それに対し、ブンホームはこの共有スペースに豚小屋を設置している。

この空き地は、これらの家畜の繋ぎ場以外に社会的共有空間としての機能を果たしている。とりわけ、子供たちはこのスペースに集まり大騒ぎして楽しそうに遊んでいる。この子供たちはテーンの妹たちの子供や近所の子供たちが含まれている。このように、テーンたち姉妹は住居をそれぞれ別個に構えながらも、屋敷地を分割することなく生活している。それだけではなく、社会的生活面や空間利用の面でもある種の相互的な扶助が指摘できる。しかし、それは水野が述べる「共働共食」の強い共同規範というよりはむしろもっと緩やかで、姉妹間や近隣間での社交的な側面に見られ「助け合い」的な意味で理解できる。

ところで、近年ノーンクン村では、家族の経済活動の範囲が村内にとどまらず、都市などにも多く仕事を求めて出る人も増加している。テーンの世帯もまたそのうちの一つである。そこで、次ではテーンの世帯を中心に上げ、経済活動の空間的広がりの中で世帯内の関係はいかに変化しているのかを見ていくことにする。

## 2. 経済活動の空間的広がり と相互扶助の継続

王妃誕生日（8月12日）のお祝いムードが落ち着いた頃、テーンの家を再び訪れた。この王妃誕生日は休日になる。そのため、出稼ぎで都市へ出ている人たちの中には、郷里へ帰省する人も少なくない。テーンの長女キアウもこの休日を利用して、村へ帰省していた。キアウとは以前に数回手紙のやり取りをしたが、会うのは初めてであった。彼女のテーン譲りの気さくで人懐っこく明るい

人柄に加え、年齢が同じということですぐに打ち解けた。彼女は翌日、アユタヤへ戻るようになっていた。そこで、アユタヤへ一緒に行かないかと誘われ、好奇心もありすぐ同意し、三女ボンパンと又従姉妹のアモーン<sup>7</sup>と4人でアユタヤへ行くことになったのである。

### (1) アユタヤでの生活

キアウが夫と暮らすアパートは、日本でいうところのワンルームマンションである。一部屋とシャワーとトイレがユニットになっているものと、ベランダ兼台所付きという感じである。興味深いことに、玄関から部屋へ入るのに靴を脱ぐのは、アパートの共有廊下である。そのため、戸々の玄関前の廊下には靴が並べられていて、玄関の扉を開けるとすぐ部屋というわけである。部屋の中には、一通りの電化製品が備わっていて、掃除が行き届き清潔に保たれている。村での生活しか知らないボンパンにとって当初、このアユタヤでのアパート暮らしは新鮮に感じられたようであった。

滞在3日目の朝8時半過ぎ、ボンパン以外まだみんなは寝ていた。ボンパンは、村での生活に慣らされているため朝は早起きである。村では朝食を7時頃には済ませ、きちんと3食取る。そのためか、ボンパンは一人起き空腹で冷蔵庫を開けたり閉めたりしていた。そのことに気付いたキアウたちに彼女は、「まだ寝てなさい」と注意された。ボンパンは一人ベランダに向かって座り泣いた。ここでは、キアウが交替制勤務のため大体、朝は10時くらいに起床し市場へ行く。それから、食事を支度し11時半くらいに朝食と昼食を兼ねた食事を取るのである。キアウの夫も彼女に合わせた生活をしている。このように、生活のリズムは村とは異なる。また、キアウも夫もとてもきれい好きで、ボンパンが散らかすとすぐ「片付けなさい」と注意する。キアウは「ノーンクン村は、牛などの家畜がいて清潔ではない。でも、ここ（自分たちのアパート）は清潔でしょ。テーンお母さんはボンパンに（きれいに掃除をするということ）を教えていないので、彼女は知らない」と話した。確かに、村では野菜を切り散らかしても、食べ散らかしても鶏やアヒルが食べてくれて片付けをする必要はあまりない。また、食べ残したものは牛小屋に投げ入れれば済むのである。しかし、アパートでの生活はそういうわけにはいかない。夕方、ボンパンと二人で留守番をしていた時、彼女に「ここでの生活はどう？」と尋ねてみた。すると、彼



女は「teenお母さんや村が恋しい。帰りたい」と答えた。ポンパンはおそらく、アユタヤでの生活に戸惑っていたのだろう。そして、彼女にとっての驚きはまだあった。

市場へ買い物に行った時のことである。キアウは、出来合いのソムタム（未熟パパイアのサラダ）を買った。値段は20バーツ<sup>8</sup>である。これに、ポンパンは目を丸くして、高いと呟いた。また、出来合いのものではなくソムタムをパパイアから作る際に、パパイアを買った時にも驚いた。驚いているポンパンを見ながら、キアウは「アユタヤでは高いでしょ」と笑って話した。ノーンクン村にある商店では、出来合いのソムタムは5バーツで売られている。さらに、ソムタムを家で作る際には、パパイアを買うのではなく屋敷地内にあるパパイアの木からもいで来るのである。ポンパンは、ノーンクン村へ帰った際にteenやナンたちに「キアウはソムタムを作るためにパパイアを買うのよ」などと話すのであった。まさに、これは自給的生活にある者の貨幣を介してしか生活できない状況を前にした驚きの言葉であった。

アユタヤでキアウ夫婦とポンパンと一週間ほど生活を共にした。その際、姉妹のやり取りや生活習慣の違いなどを中心に観察してみた。キアウもポンパンと同じように、ノーンクン村で生活を送ってきた。しかし現在、キアウは都市へ出て約7年の時間が経過しその環境に慣れ親しんでいる。そして、それが普通となっているのである。また、前述したように、村での生活は清潔ではないと批判する立場も取る。さらには、これも前述したことであるが、農作業もあまり好んでいないようでさして手伝うこともない。ここまで見ると、キアウは完全に村との生活から離れ自分たちの生活を確立しているかのように見えるかもしれない。しかし、同じ東北出身者が経営する商店へ行った際にはポンパンを「妹なの。今、遊びに来ているの」などと紹介することもあった。また、曲毛であるポンパンの髪の毛を気遣い美容室へ相談しに行くということもあった。実家への帰省は、定期的に年に数回している。また、実家への連絡も頻繁にしている。

この連絡の手段には変化が見られる。30年程前には、手紙が都市へ出ている人との主要な連絡手段であったという。しかし近年、携帯電話が普及し村においても例外ではなくなった。そして、連絡手段は主要だった手紙から携帯電話へと変化してきている。キアウにおいてもそうであった。しかし、彼女や実家

の家族が携帯電話を持っているわけではない。彼女は部屋の家庭電話を使用するとお金がかかるという理由から、カード式公衆電話を使用する。まず、公衆電話から実家の近所に住む親戚が持つ携帯電話にかける。そして、家族に代わってもらうのである。そうやって、彼女は月に数回電話をかけている。電話での連絡は増えたが、手紙も連絡の重要な手段であることには違いないだろう。このように、キアウはアユタヤでの自分の生活を村の生活や家族から切り離して考えてはいない。しかも、彼女の実家とのつながりは精神的なものだけではなく、経済的なものでもある。次では、後者の経済的なつながりを中心に世帯内の相互扶助はどのように継続されているのかを見ていく。

## (2) 相互扶助の継続

キアウは前述したように現在、アユタヤで夫と生活をしている。出稼ぎに出ているというわけではない。彼女は19歳で最初の結婚をする。最初の夫は、同じ郡出身であった。結婚後二人は、バンコクへ移り住む。しかし、夫は間もなく交通事故に遭い他界したという。その後、アユタヤへ移ったのである。そこで現在の夫と出会う。彼女がアユタヤへ行くことになった背景には、おそらく前述した又従姉妹のアモーンが関係しているのではないだろうか。アモーンはキアウよりも4年程先にアユタヤで働いている。そして、アモーンはブンホームの中学を卒業した次男を一年程前からアユタヤへ連れて行き、働き場所を紹介した。このことから、キアウのアユタヤ行きにもアモーンが関係していると考えられる。

キアウはこうして現在、アユタヤで夫と共に世帯を構えながら、実家へ毎月仕送りをしている。彼女の月給は、7,100<sup>9</sup>バーツでボーナスは1万7,000バーツである。実家への仕送りは毎月1,000バーツである。家賃と光熱費などの諸経費を含んだ3,000バーツを差し引いた残り、3,100バーツで彼女は生活をしている。夫は当時失業中であった。しかし、現在は新しい就職先が決まったということである。彼女の生活は決して楽なものではないだろう。それにも関わらず、実家に毎月の仕送りやその他の資金援助なども行っている。

キアウが仕送りしたお金は、村での家族の生活費やポンパンの学費として使用されている。キアウは、「うちは貧しいし、ポンパンはまだ学校へ行っているからお金が必要なの」と話してくれた。次女のナンが一年程前に住居を建築し

た。キアウは、このナンの新居の建築費も無利子で貸したという。建築費は、総額4万バーツであった。そのうち、彼女が貸したのは1万バーツであった。残りは、テーンやナンの夫が出したということであった。

ナンが新居を建築した場所は村内にあり、実家から歩いて数分のところである。そして、この土地は以前にテーン夫婦が購入していたものであった。すでに、ナンは新居での生活を始めている。しかし、子供がまだ幼いことと夫がバンコクへ出稼ぎに出ていることから、朝起きてから夜寝るまでの生活をすべて実家でしている。つまり、自分の家には夜寝るためだけに帰るのである。この話を聞き、いくつかの疑問が浮かんできた。そして、キアウに「ナンは新しく家を建てたけど、実家はどうするの?」と尋ねてみた。キアウは「ボンパン（末娘）のものになるの」と答えた。さらに、「ボンパンがテーンお母さんの世話をするの?」という質問に「そうよ」と答え、「キアウは?」には「私の家はないわ」と答えた。筆者の質問に答える彼女の表情からおそらく、自分には村に帰る場所はないと感じているような彼女の気持ちが読み取れた。

妹たちには村内にそれぞれ家があり、自分にはないという現実を受け止めながらもキアウは、実家に対して経済的援助を続けている。その反面、村での生活は自分の生活と比べて、清潔なものではなくあまり良いものではないという意識も持っている。しかし、彼女の生活は村の生活から切り離されることなく維持されている。キアウの母であるテーンは、キアウの暮らすアユタヤへ行くことはない。キアウがアユタヤへ戻る際には、家で収穫した米を大きな袋一杯に詰めて持たせ、悲しそうに娘を見送るテーンの表情は遠くに暮らす娘をとっても気にかけているようであった。キアウのそうした生活は、村の生活と母娘関係の面においても、相互扶助的に関係しあって成り立っているのである。

しかし、実家を離れ都市に住むことで、維持しようとしても維持できない共同性領域というものがある。それは、故人となった父母や祖父母の追善供養の機会である村の諸仏教行事への参加、および「共働共食」や日常的な社交に見られる共同性の領域である。しかも彼女は明らかに、近代的都市的生活のもとの新たな価値観を身につけ、村から来た妹に対してその価値観に順応することを求めている。経済的に仕送りすることや連絡を取り合うことで家族としての紐帯を維持しつつも、彼女の生活理想としての価値観はすでに村のそれからは遊離している。

## 結 び——問題点と今後の課題——

これまで論じてきたように、水野が「屋敷地共住集団」概念を提示してから40年経った今日、親族関係の中で培われてきた「共働共食」という語で象徴された共同性の内実は明白にあらたなものへと移行している。テーンの家族における「屋敷地共住集団」も、家族サイクルの移行に伴い従来のものとは異なる局面へと変化してきている。それは、村と都市との空間的広がりの中で日常的な共同性ではなく、経済的な相互扶助に重きを置くことになっている。たとえ、経済的なつながりは残っても、実家を離れ都市へと移住する人の意識は村のそれとは異なるだろう。そして、意識や生活の変化が及ぼす影響としては、可能性として次のようなものが考えられる。

第一には、出稼ぎ労働者や出稼ぎ先に世帯を構えた人びとと、村とを強く結び付けている仏教儀礼である。その例として、カティナ衣献上<sup>10</sup>という儀礼が上げられる。これは、功德を積む行為であると同時に、郷里に錦を飾る行為であり、自らのアイデンティティを確認表現する行為である。このような出稼ぎ労働者による布施行為は、定期的に郷里の寺院に行い続けられる[高井 2000 : 136-137]。これは、郷里の村を離れた人にとって、根無し草的にならず生きる方法なのかもしれない。しかし、この布施行為は本当に永続的なものなのか。

第二には、妻方居住制に基づく女性中心制、そして、末娘相続というかたちで守られた姉妹近接居住、「共働共食」に象徴される共同性はどこまでも農業という土地、しかも娘が相続することで維持されてきた。そのため、近隣居住によって十分に機能していた。ところが、都市への移住も徐々に始まり都市生活者の価値観や衛生意識の変化、貨幣依存の慣習などでも共同性の領域が侵食され始め弱まる可能性が生まれている。また、夫が給与所得者で都市生活を余儀なくされる場合、果たして村では強い慣行として受け継がれる妻方居住といった女性中心の系譜意識も相対化される可能性があるのではないか。

今回は一例の報告にとどまった。しかし、今後はより観察ケースを増やし、最後に問題視した点も射程に入れつつ東北タイ農村の変化をその価値観の変遷というレベルにまで掘り下げる作業を続行したい。

## 参考文献

- 石井米雄編『タイの事典』同朋舎、1993所収（高井康弘執筆分）
- 北原淳編『タイ農村の構造と変動』勁草書房、1987
- 高井康弘「儀礼実践の動態」（北原淳・赤木攻・竹内隆夫編『続タイ農村の構造と変動』勁草書房、2000所収）
- 口羽益生・武邑尚彦「屋敷地共住集団」再考—東北タイ・ドンデーン村の追跡調査（中間報告）—、『東南アジア研究』21巻3号、京都大学大学院東南アジア研究センター、1983
- 前田成文『東南アジアの組織原理』勁草書房、1989
- 水野浩一『タイ農村の社会組織』創文社、1981
- Tambiah, S. J., "Animals Are Good to Think And Good to Prohibit", *Ethnology*, Vol. VIII, Univ. of Pittsburgh, 1969.

## 注

- 1 「屋敷地共住集団」論に関する文献には以下のようなものがある。北原淳「タイにおける『屋敷地共住集団』と集落の社会史」『アジア経済』26巻11号、1985年 口羽益生・武邑尚彦「屋敷地共住集団」再考—東北タイ・ドンデーン村の追跡調査（中間報告）『東南アジア研究』21巻3号、1983年他多数。
- 2 タイでは本名で呼び合うことはほとんどなく、通称で呼び合うことが一般的である。従って、本論文においても人間の名前はすべて通称で使っている。
- 3 姉妹の年齢は、テーン47歳、ブンホーム44歳、ウボン38歳（2001年時点）である。
- 4 S. J. Tambiahは4つの方角にはそれぞれ価値があることを述べている。東は日の出の方角で吉兆であり、生を象徴し、神聖である。また、人が北を向く時右手の方角にあたり、男性を象徴する。そして、西は不吉であり、死や不浄を象徴し、日の入りの方角である。それはまた、左手や女性を象徴するとされる。北は吉兆であり、南は中立的な価値があるとされる。
- 5 1ライは約0.16ヘクタールである。
- 6 キアウたち3姉妹の年齢は、キアウ26歳、ナン23歳、ボンバン16歳（2001年8月時点）である。
- 7 又従姉妹アモーンの母方の祖母とキアウの母方の祖母（テーンの母親）が姉妹となる。アモーンもノーンクン村出身で実家は、テーンたち姉妹の屋敷地の西隣である。
- 8 1バーツは約2.78円（2001年8月時点）である。
- 9 ノーンクン村での高給取りである30代男性銀行員の月給は約7,000バーツである。
- 10 雨安居明けの旧暦11月黒分から1ヵ月の期間のみブッダが僧侶に着用を許された特別の僧衣をカティナ衣という。この期間に僧侶へカティナ衣を献上することは、在家者にとって大きな功德を積む行為の1つであり、仏教の庇護者たる国王の年中行事にもなっている [石井1993: 86]。